



作家による制作イメージ

ここに、バルーンはない。
Here, No Balloon.

Yuki Onodera

会場：RICOH ART GALLERY

会期：2022年3月19日（土）～ 2022年4月9日（土）

時間：12：00～19：00 ※最終日18：00終了

休廊日：日・月・祝

※ 新型コロナウイルス感染防止に伴う政府・東京都の方針により、営業時間・会期は前後する可能性があります。

この度、RICOH ART GALLERY では、パリを拠点に活動する写真家・オノデラユキの個展「ここに、バルーンはない。」を開催いたします。本展は、8階と9階の二つのフロアを使用して、StareReap による立体印刷の最新作に加え、オノデラ自身がこれまでの作品からセレクトした作品から構成された展覧会となっています。

オノデラはデビューである「第一回 写真新世紀」(1991年)から現在に至るまで、写真というメディアの枠組みを超えた作品制作を続けてきました。1993年からパリに拠点を移し、世界を舞台に作品を発表しています。その写真へのアプローチは多彩であり、カメラ自体に手を加えて撮影したり、時にはペイティングの要素を取り入れるなど、自由な想像力を作品に投影してきました。

StareReap とのコラボレーション

このように、幅広い手法で知られているオノデラの作品ですが、そこに一貫しているのは日常の中で感じた素朴な疑問や好奇心を大切にしていることではないでしょうか。過去のインタビューでオノデラは次のように答えています。

「アイデアは、芸術や映画を見てインスパイアされるというようなものではなく、日常の中でふっと湧いてくるような感じかな。これは何だろう？と考えたり、見ているうちに、なにか全然違う要素と結びついたり、頭のなかで醗酵させる時間が必要です。(中略) そんな感じで、アイデアは衝撃的なひらめきから生まれるというようなことではなく、普段から気になることや疑問が頭にあって、それが時間を経てある時、始めよう！とスイッチが入る感じです。私の場合、頭の中にあるアイデアとは、言葉であったり、イメージであったり、コンセプトであったり、技術であったりとごちゃまぜの状態です。コンセプトだけが浮くような作品が多くみられますが、視覚芸術である限りやはりイメージです。イメージが言葉と結びついたり混沌としたところから始まって徐々に形になって行きます。(後略)」[1]

リコーの StareReap とのコラボレーションは、昨年、2021年の秋にオノデラが RICOH ART GALLERY の展覧会を観たことが契機となってプロジェクトがスタートしました。新しいプリントテクノロジーである StareReap は何を狙っているのか—その意図を瞬時に感じ取ったオノデラは次々とリコーの技術者に質問を投げかけました。短時間ながらも濃密なやり取りの末にフランスへ帰国したオノデラは、本格的に今回の新作について構想を始めます。自由な渡航が難しい状況下においても、オノデラとリコーはオンラインでの打ち合わせや、試作プリントのやり取りを重ね、StareReap による新作を完成させました。印象的な展題である「ここに、バルーンはない。」について、作家は自身で次のように語っています。

—作家ステートメント

きっかけは1900年初めにパリで撮られた一枚の写真だった。

当時の服装を身に纏った人々の後ろに堂々としたモニュメントがある。そのブロンズで作られたモニュメントは複数の人間の彫像が重なるようにして立ち、頭上の大きなバルーンを支えている。パリに住み随分と時が経ったが、このようなモニュメントは一度も見ることがない。調べてみた。ニューヨークの自由の女神で知られる彫刻家 Bartholdi によって作られたもので、熱気球の操縦士と伝書鳩を讃えるためのモニュメントであった。このモニュメントは現存しない。1941年、パリがドイツに占領されていた時に他の何百もの彫像とともに「溶かされた」というのだ。



当たり前のことだが、私がハッとしたのは金属であるブロンズの彫刻は溶けるということだ。絵画や写真を破壊するには、燃やすか破るか、しかし彫像は溶けて別のものに生まれ変わるのだ。「そう、何百もの彫像と共ににどろどろと溶けていく…」。

早速カメラを片手にこのモニュメントがあった場所、Porte des Ternes に行ってみた。現在は高層ホテルが唐突に一棟聳えていて、大通り入口右側のわずかな家並みと「Ballon des Ternes(テルヌのバルーン)」というレストランの名前のみが昔の記憶を留めているだけだ。私は古い写真当時の広場を想像しながらモニュメントがあったであろう、その辺りの風景をモノクロの銀塩フィルムに一枚一枚収めていった。熱気球という過去の技術や伝書鳩という古のコミュニケーションに想いを馳せながら。この場所を撮影したフィルムは私自身の手により 2m 近い大型の銀塩写真となり、そのプリントは粗めのキャンバス上に存在感を持ってコラージュされる。

さてここからが今回の制作の要だ。

大きく拡大された銀塩写真の粒子は砂目のように荒く、そのプリントのざらついた表面上に違和感際立つ StareReap プリントをぬらぬらと被せ次元を飛び越える。それは私にとって「溶けて無くなった彫像」の不在を呼び戻すような行為なのだ。「溶ける」をキーワードに溶かしたオブジェをデジタルカメラで撮影し、さらに時の流れの重さを積み重ねるように、その溶解物中に数多のイメージを内包させる。StareReap プリントによる滑らかではあるがレリーフのような立体的で厚塗りの絵の具のようなカラー・イメージ、それと現在を表したモノクロプリント。そのふたつの衝突と融合。

その場に居合わせているかのような等身大のプリントは 7 点連作として並び、RICOH ART GALLERY の円形空間をパノラマとしてパリの広場をそこに現出させる。プリント上に移植された異形のイメージは時と場所の混濁とイメージの飛翔を促すだろう。

今回の RICOH ART GALLERY の展覧会ではこの新作と同時に 2006 年から 2014 年に製作された《Eleventh Finger》シリーズ数点など過去作品も交えた形で展示する。《Eleventh Finger》は隠しカメラで人々の仕草や動きを撮影したシリーズ。顔の部分がフォトグラムの技術で隠され、その顔を隠した白いマスクには様々なモチーフが無数の穴で開けられている。穴を通して露出する銀塩写真の粒子と、フォトグラムで焼き付けられたフラットな白い滑面の対比が、新作『ここに、バルーンはない。』と気持ち良く響き合うであろう。

7点から成る StareReap によるパノラミックな新作群は、オノデラにとって初めてとなるデジタルカメラで撮影したイメージをベースに制作しています。キャンバスに銀塩でプリントされた支持体の上に、StareReap によって生成されたコラージュの図像を重ね合わせます。このアプローチによって、物質的な StareReap のプリント特性を引き出そうとしています。

ここに、バルーンはない。

新作のテーマである、第二次世界大戦中に姿を消した「溶けてなくなったバルーンの彫像」について思いを巡らすことは、「なぜ溶かさなければならなかったのか」という理由を同時に想像することでもあります。7点のプリントは、このところ激しさを増す世界情勢にオーバーラップするように、私たちに想像力の重要さをひととき強く問いかけます。

オノデラらしい、しなやかな眼差しに貫かれた本展を、どうぞ高覧いただきますようお願い申し上げます。

[1] 「オノデラユキ INTERVIEW」『写真新世紀』

<https://global.canon/ja/newcosmos/closeup/yuki-onodera/> [公開年 2020年]

オノデラ ユキ | Yuki Onodera



東京生まれ。独学で写真を学んだ後、1993年からパリを拠点に発表を続ける。2006年にはフランスで最も権威ある写真賞「ニエプス賞」を受賞。日本国内でも数多くの展覧会を開催。主な個展は、東京都写真美術館（2010年）、フランス国立ニエプス美術館（2011年）、ヨーロッパ写真美術館（パリ、2015年）ほか。世界中の主要美術館で作品もコレクションされている。ボンビドゥー・センター、サンフランシスコ近代美術館、ポール・ゲッティ美術館、上海美術館、東京都写真美術館などで作品を観ることができる。

<https://yukionodera.fr/ja/>

現在、プロヴァンス＝アルプ＝コート・ダジュール地域圏に所在するムージャン写真センターで全点未発表の新作による個展を開催中。

Yuki Onodera

Centre de la Photographie de Mougins, France

2月26日～5月22日

<https://centreprhographiemougins.com/>

https://yukionodera.fr/mail/mougins_mial-info_4/



RICOH ART GALLERY



Facebook



Instagram



Reservation

RICOH ART GALLERY

リコーアートギャラリー

場所：〒104-0061 東京都中央区銀座5-7-2
三愛ドリームセンター 8F・9F

TEL：03-3289-1521

お問い合わせ：zjc_ricoh-art-gallery@jp.ricoh.com